

最優秀賞

長崎県立大村高等学校 三年

永田 海生

サメよりもはるかに大きいイワシの群れみんながいれば怖くないんだ

優秀賞

佐賀・早稲田佐賀高等学校 二年

宮崎 淳也

人は言う武器を持てば安全と武器を持つから傷つけ合うのだ

千葉県立安房高等学校 三年

谷 英里紗

大きくて硬く丈夫な祖父の手は人生語る無言館むごんかんかな

佳作

熊本・熊本信愛女学院高等学校 三年

平嶋 遥歌

二年前地震がさらったこの町に今咲き誇る名も知らぬ花

群馬県立太田高等学校 一年

白沢 貴悠

放課後に君にもらったソーダ水泡立つ心を君は知らない

長崎・聖和女子学院高等学校 一年

山邊 愛恵

名の由来愛に恵まれますように生涯誇れる親の贈り物

福岡・西日本短期大学附属高等学校 一年

大塚 佑介

夏の夜に瞬く星を眺めては僕の未来は未知数だと知る

千葉県立安房高等学校 三年

川名 遼

今日の花あしたあるかはわからないただ今日だけをひしに生きる

入選

千葉県立若松高等学校 二年
井出 穂香
曖昧に愛す藹とは相容れぬ哀を合図に遭い、逢い、会いたい。

東京・東星学園高等学校 二年
川北 直果
亡き父の引き出しあけて涙する下手くそな絵と「パパありがとう」

茨城県立結城第二高等学校 四年
広瀬 大輝
手を伸ばせば届きそうな春の月につこり笑った母さんに似て

福島県立会津高等学校 三年
船窪 花純
脳内に削除機能がついたなら使うだろうか、いや、使わない

奈良県立畝傍高等学校 二年
井嶋 南里
白線の向こうを君が駆けてゆく五月の風を味方につけて

埼玉県立浦和第一女子高等学校 二年
宇貫 真布
人生で今日が一番若いんだだから私は諦めたくない

埼玉県立深谷商業高等学校 一年
岩田 凌央
亡くなった祖父からの愛をいつかまた新しい芽に吹きかけたい

宮城・常盤木学園高等学校 二年
羽根田 瑞希
戦争に断たれた夢の甲子園無念の思い未来へ託す

長崎県立大村高等学校 一年
松本 愛里
やるまえにできないと決めしないのは自分の力なめてる奴だ

大阪府立堺東高等学校 一年
平和 陸斗
思い出とともに置き行く少年のあの木のかげのむぎわらぼうし

短歌の部選評

歌人

田中 章義

今年是学校ごとでは長崎県立大村高等学校、千葉県立安房高等学校、西日本短期大学附属高等学校の作品に注目した短歌がたくさんありました。すばらしい先生のもとで感性を耕すことのできる至福を思います。

入選歌以外ではLGBTの作者の想いを詠んだ「唯一の貴女が好きよこれからも言わないけれど言えないけれど」(廣渡光優)という作品にも注目しました。他者が何と言おうとも、自分の正直な気持ちをダイレクトに詠んだ作品がもつともっとあってもいいと思います。少数派であることも大事な個性です。作者ならではの境遇と真摯に向き合った作品がきつと他の誰かの希望となるのだと思います。他にも、兵庫県立農業高校の「体育の声をかければ農業の牛も同じく掛け声で鳴く」(伊東優衣)という作品も独自の世界を詠んでいて、印象に残りました。花火や高校野球など、多くの人が同じ素材の歌を詠んでいた中、自分だけのテーマ(モチーフ)を見つけて、そこにこだわった表現をした作者の歌には力がありました。工業高校や水産、林業などを学ぶ高校の皆さんにもぜひチャレンジジ

してほしいと願っています。

以下、注目した作品をご紹介します。「ぼくはきみきみはぼくには非ずとも一緒に食べるカレーはうまい」(有吉玲)、「祖父の死にうなだれてゆく母の背を大きな兄の手やさしくさする」(松尾優那)、「どこまでも菜の花の道続いている蝶といっしょに寄り道をする」(川原咲来)、「城跡に咲く葉桜の香りこそ空へ広がる命の息吹」(福島真生)、「川沿いでアメンボみつけ追いかけて水に映った昔の自分」(石井見基)、「芋虫や蛹で終わらず蝶になり新しい世に舞い続けよう」(星野優月)、「しわしわのティッシュにくるんだお年玉祖母の気持ちはあったかい」(松尾菜々子)、「桜道まっすぐ歩くランドセル親は静かにそれを見守る」(川名雄也)、「あの頃にみた夢いまはすぐそこにいまのあなたは一人じゃないから」(赤池俊哉)、「震災に生まれし妹小学生いつか話そうあの春の日を」(佐々木優子)、「皿うどん店の味より祖母の味お盆の夜に集って食べる」(中村真子)、「新米の口に広がる甘さから思い浮かぶは祖母の温もり」(佐々間ひなた)、「その笑顔あれから七年変わらぬ君の強さは笑顔をうむ」(狩野央梨沙)、「川べりの風吹き抜ける道の先枝垂柳の影やわらかし」(瀬藤真璃音)、「瓦礫から微かに芽吹く希望の芽未来に向けて枯らすことなく」(山口竜生)、「友達と親の離婚を笑ってる 話す瞳は潤んでる」(高岡寿璃綾)、「あの日から止まった

時計充電し新たな世界切り開く時」(佐々木彩)、「風鈴が風に揺られて歌い出すまるで天使の子守歌だね」(小野瑞季)、「年齢も血の繋がりの性別も妨げはしない愛こそあれば」(平林晴人)、「あじさいの花から落ちる水雫こころ落ち着くその美しさに」(佐藤朋)、「ひとり旅ペダルこぎ出す我を見て無事に帰れと祈る母あり」(村上賢)——他にも紹介したい作品がたくさんありました。今の想いは今の自分にしか詠むことができません。これからも作品を生み出し続けてほしいと願っています。

●田中 章義(たなか あきよし)

昭和四十五年静岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。大学一年生のとき第36回角川短歌賞を受賞。以後、「地球版・奥の細道」づくりをめざし世界を旅しながら、ルポルタージュ、紀行文、絵本など多数執筆。世界で詠んだ短歌が英訳され、平成13年国連WAFUNIF親善大使に就任。JICA「21世紀のボランティア事業を考える会」検討委員、国連環境計画・地球環境平和財団「地球の森プロジェクト」推進委員長、ワールドユースピースサミット平和大使などを歴任。短歌集の他、絵本や人物ルポルタージュなどの著述もあり、松井秀喜選手や北島康介選手の社会貢献活動を紹介した単行本も執筆。BEGINなどミュージシャンの歌詞も手掛けている。